

[書 評]

## 人種研究の深化 表象とリアリティのあいだ 『人種の表象と社会的リアリティ』

[竹沢泰子編, 岩波書店, 2009年]

関 口 寛

(四国大学経営情報学部)

### はじめに

近年、人種や民族、国民などといった人間集団の単位について、様々な研究領域のなかで批判的な再検討作業が進められ、これらの虚構性やイデオロギー性が明らかにされてきた。かかる概念はしばしば普遍的な存在として自明視され、二〇世紀の世界秩序を基礎づける役割を果たしてきただけに、こうした動向はそれぞれの専門分野において少なからず反響を巻き起こしてきた。本稿がとりあげる竹沢泰子編『人種の表象と社会的リアリティ』(二〇〇九年、岩波書店)も、こうした研究潮流のもとに生み出された人種に関する共同研究の書である。

同書をまとめた共同研究グループは、すでにその成果の第一弾として竹沢泰子編『人種概念の普遍性を問う』(二〇〇五年、人文書院)をまとめている(以下、前書と略す)。そこでは、一九世紀いらいの人種概念の歩みを、時間的、空間的広がりの中で検証するとともに、現代の生命科学の最前線の研究成果を踏まえて、人種概念を包括的に理解するための枠組みが提示されている。人種は生物学的実体を持たない社会的構築物に過ぎない。こうした理解は近年の科学研究の飛躍的な進歩にともなっ

て優勢となり、今日では広く社会に普及しつつある。果たして人種研究の深化は、根強く存続し続ける人種主義の解決へわれわれを導くのであろうか。このテーマに評者も含めて多くの研究者の関心が向けられている。

しかし、そのためにはまだ乗り越えるべき大きな壁が立ちだかっていることを認めなければならない。生物学的実体を持たない人種が、何故これまで現実の社会を動かし続けてきたのか。また現在においても強固なリアリティを有し、実在しているように見えるのか。この困難な問いに対し、本書はさまざまな人種表象のかたちを取り上げ、そこに潜む多面的な性質・性格を検討し、それらに共通する特性を見出すことをつうじてその答えの糸口を探ろうとしている。

本書の各論が取り上げるのは、日本、東アジアから南北アメリカ、西洋諸国という多様な地域における事例である。また各執筆者の専門は歴史学から人類学、生命科学など多分野に及ぶ。前書いらいの超領域的な視点とその成果を総合しようとする姿勢が強く打ち出されており、本書の大きな特色となっている。そして各分野の第一線で研究に従事する執筆陣による事例研究は、あらためて人類社会が

経験してきた人種にまつわる現象の多様性を浮き彫りにしている。以下、本書の特徴と気づいた点について述べてみたい。

#### 大衆メディアと人種のリアリティ

まず本書では、人種が社会的実在としてのリアリティを獲得するメカニズムとして、絵画や映画という視覚的表象を多く取り上げている。いうまでもなく人種にとって最もわかりやすい指標とされるのは皮膚の色や体毛、頭形といった視覚的に把握される身体的な表徴であり、絵画や映画は人びとに人種分類とそれに基づく世界像を伝達する有力なメディアとして機能する。

貴堂嘉之「アメリカ合衆国における「人種混交」幻想」(第1章)は、「人種」と「人種」の距離を維持・拡大させ、その実在性を日常のレベルで作り出し、支えたものとして、映画における異人種間のセクシュアリティの表象と、その歴史的変遷を追っている。

アメリカにおける「人種」の歴史においては、しばしば一滴血統主義による白/黒の厳格な二分法が強調され、植民地時代から一貫してきた人種混交禁止の社会秩序が説かれがちである。しかしこうした認識の背後には奴隷制時代の人種混交、黒人に対する暴力(奴隷に対するレイプ、去勢、リンチなど)の忘却がある。

貴堂によれば、こうした忘却は二〇世紀に入り、南北戦争五〇周年を迎える時期のアメリカ社会において、南北分断の状況を克服し、白人を中心に据えた国民の再統合が企図されるなかで生じた。同時期以来、奴隷制廃止をめぐる白人社会が二分された歴史が封印されるいっぽう、大衆メディアである映画のなかでは白人と黒人の対立を軸に据えた作品が制作され、白人を中心とした国民共同体イメージが宣伝されてゆく。

その際、映画産業界では映像表現にかんする倫理規定が策定され、これが白人と黒人の関係をめぐる社会規範を築く役割を果たすよ

うになったとする。とくに一九三四年のヘイズ・コードでは、白人と黒人との性的関係を描くことが禁止された。国民の精神的・道徳的向上に寄与し、より優れた社会生活を営めるように貢献することを目的に制定されたこの規則により、少なくとも映画の世界では奴隷制や人種混交の過去や記憶が封印されてゆく。この「不在の構造化」は、人種混交を社会的禁忌として人びとに刷り込むことになったのである。ここではジェンダー、人種といった概念が白人男性を中心とする関係性のもとに配置され、「国民」意識が創出されたことが明らかにされている。

同論文が興味深いのは、「人種」をリアルなものとして認識させるメカニズムにおいて、大衆メディアの果たす役割に注目していることである。映画は人種とセクシュアリティの概念が交差し規範化する場であり、それを国民に伝達する装置でもある。近年では新聞、ラジオ、映画やテレビといった大衆メディアにかんする研究が盛んになってきており、こうした研究との接点を探ることは、他地域の人種研究においても有効な視座となるであろう。

#### 抗争のアリーナとしての人種表象

次に本書の諸研究から浮かび上がるのは、人種表象は立場を異にする多様な思惑・戦略が交錯する場であり、そうした不断の闘争の結果、あるいはその堆積によってリアリティがもたらされているという知見である。

井野瀬久美恵「もうひとつの「ネルソンの死」」(第3章)、黒川みどり「〈見えない人種〉の徴表」(第6章)、石橋純「「黒人」から「アフロ系子孫」へ」(第9章)、竹沢泰子「ポスト多文化主義における人種とアイデンティティ」(第10章)、川島浩平「人種表象としての「黒人身体能力」」(第11章)は、絵画や映画などの作品に表象された人種を、同時代の人種間抗争との関わりのもとに考察している。これらの表象はしばしば、単純に制作者の主観や意図、あるいは社会的現実の反映として

捉えられることがある。しかし上記の諸論文が共通して明らかにしているのは、人種の表象は歴史社会的な文脈における諸集団間の抗争の過程、あるいはその戦略のもとに把握するというものである。

まず井野瀬論文では、ネルソン提督が率いるイギリス海軍の戦いを描いた、同じ題名の二枚の絵画（制作者はベンジャミン・ウェストとマクリーズ）が分析されている。同論文は両者の比較をつうじて、後者には前者に登場しない黒人や女性が描かれていることに注目している。

マクリーズがこれら周縁に追いやられた人びとを作品に登場させたのはなぜか。井野瀬によれば、それは人びとの歴史を白人男性や英雄を中心とする国民の物語へと回収してきたイギリス社会を欺むく企てである。さらに黒人にはマクリーズの故郷・アイルランドの「奴隷のような」といわれた農民の苦悩が擬せられているという解釈が示される。すなわち彼の作品には複数の思惑が埋め込まれており、そこに植民地支配への異議申し立てが示されているというわけである。

黒川論文では、人種の表象がより直截な政治性を帯びる事例として日本の部落問題を描いた映画を取り上げている。黒川は住井すゑの小説『橋のない川』を映画化した今井正監督作品（Ⅰ部 1969年、Ⅱ部 1970年）と東陽一監督作品（1992年）を比較し、部落差別を映画化するに際し、被差別部落民をいかに描くかを争点として運動団体のあいだで対立が繰り広げられてきたこと、また前者から後者への時間的経過のなかで部落民アイデンティティの変容がみられることを指摘する。

すなわち二つの映画には被差別状況のリアリズムを追求しようとする芸術上の問題や、差別表現を規制すべきとする運動の要請など、映画上にいくつものコードが交錯し、この立場や戦略の違いから作品評価をめぐる対立に発展する経緯を説明する。

こうした抗争じたいは、マイノリティが支

配集団との葛藤のなかで自己を表象し、集団を再生産する過程ともいえる。黒川の研究は被差別当事者が人種主義に抗するための自己像を産出し印象操作をはかっていること、いかにすれば自己表象の底部にはアイデンティティ管理という領野が広がっていることを浮かび上がらせている。

石橋論文では、現代のベネズエラにおける多文化主義の導入とアフロ系「民族」創出にむけた動きが取り上げられている。南米では多くの国で公式的に「混血ナショナリズム」が表明されており、センサスにも人種項目が掲げられていないという特徴がある。しかし実際にはアフリカ系の人びとへの差別があり、近年、「アフロ系子孫」として自らの存在を政府に承認要求する当事者運動を展開しているという。

同論文からは、可視的な徴表である皮膚の色にもとづく差別が存在するにもかかわらず、それが公然化されてこなかった南米の人種主義の特徴が分かる。また同時にそうした被差別当事者の自己主張の言説によって、はじめて人びとの意識のなかにリアリティを備えた人種集団が立ち現れてきたという事実が興味深く分析されている。

前書において竹沢は社会で劣位の人種と位置づけられた人びとが集団的な抵抗を起こす際、新たな意義づけをともなって登場する「抵抗の人種（Race as Resistance）」という枠組みを提示している<sup>1)</sup>。そしてこうした抵抗のアイデンティティは、石橋論文が示すように今日においても決してその必要性が減じたわけではない。またこうしたアイデンティティ・ポリティクスはネオリベリズムの風潮が広まった現代社会においては、いっそう先鋭的なかたちで現われてきているのかもしれない。

竹沢論文、川島論文はともに現代アメリカにおける人種的アイデンティティの揺らぎや変容を分析している。

まず川島論文はしばしば真実のように語る

れる「黒人の身体能力の高さ」の言説を、歴史的文脈のなかで考察する。川島によればこの言説は精神对身体の二元論と、白人の精神的優越を前提に立脚しているものの、何ら科学的根拠を持たず、歴史的社会的に形成されてきたイメージ、神話にすぎない。むしろ第二次大戦前には三大プロスポーツとされるベースボール、アメリカンフットボール、バスケットボールにおいて、黒人アスリートは例外的存在であった。しかし公民権運動が高揚した一九六〇年代以降、スポーツは黒人にとって経済的成功と社会的進出の舞台となり、差別と貧困をはね除け黒人に肯定的なアイデンティティを付与する手段となる。そして一九九〇年代に入るとスポーツ競技において黒人が数的優位を占めるようになり、黒人身体能力神話が広く浸透したのである。

しかしこうした背後で、スポーツに挫折し、人生に落伍して立ち直れない多くの黒人アスリートの存在が指摘されるようになったのだという。そして、むしろ世紀転換期以後の映画界では運動能力だけではなく文芸や学業など多様な方面における黒人の能力を強調する対抗表象が広がりつつあることを紹介している。

いっぽうの竹沢論文は二一世紀のアジア系アメリカ人アーティストの活動と作品を取りあげている。彼らへのインタビューをつうじて明らかになるのは、アメリカ主流社会から向けられるエキゾチズムを満たさんとする好奇の眼差しをずらしつつ、自身のルーツに根ざしたあらたなアイデンティティを成型し承認させようとする、彼らの自己表象戦略である。竹沢は、彼らの芸術活動の特徴として、人種集団のカテゴリーやラベルの可視化に消極的であること、しかしなお根強い人種主義に対し、旧来とは異なる「抵抗」を模索していることを指摘している。

竹沢、川島両論文からはともに、多文化主義を標榜する現代アメリカ社会に、人びとの多様性への無理解やステレオタイプな表象に

たいする対抗表象の広がりがあることが分かる。上の諸論文の内容と重ねて考察すれば、人種主義への抵抗として産出されるマイノリティの自己表象が人種をリアルな存在にみせているものの、じつはそれが常に模索と変容の途上にあることを如実に物語っているといえよう。

### 「見えない人種」概念について

本書所収の多様な地域の事例研究を総合して眺めた場合、それぞれの人種現象には個々の社会的な文脈における固有性と、地球規模で生じた歴史的共進性という両側面があることが示唆されており、本書の興味深い視座となっている。またその結果、人種にかんする研究に新局面がもたらされつつある感を強くする。

本書第2部では、ナチス時代のドイツにおける「アーリア人種」の絵画表象を扱う藤原辰史「虚ろな表情の「北方人」」(第4章)、戦前期日本における朝鮮人について日本の自然人類学者らが展開した科学言説をとりあげた李昇燁「顔が変わる」(第5章)、および戦後日本の被差別部落民の映画表象をとりあげた黒川前掲論文が、ともに「見えない人種」の表象を分析している。この「見えない人種」概念は本書の人種研究の視角とも重なる重要な論点を提示している。

一般的には人種とは身体形質上の差異にもとづく区分であり、民族とは文化的差異にもとづく区分、さらにいえば国民とはその人の属する国籍による区分とそれぞれ概念規定がなされる。そのため日本社会では「人種主義」からアメリカにおける黒人差別や、ナチス・ドイツのユダヤ人大量虐殺を想起することはあっても、日本社会の在日朝鮮人や被差別部落民への差別はそれぞれ民族差別、身分差別としてこれとは切り離して受け止める傾向が強い<sup>2)</sup>。しかしその一方で、日本社会では人種、民族、国民の三つの概念の区別は曖昧で、マスコミの報道においてもしばしば混

同して使用されていることについても、つとに指摘されてきている<sup>3)</sup>。

竹沢はこうした状況を踏まえ、これらの概念や差別を個別に分断することなく、人種をめぐるより広い包括的な議論の俎上にのせて考察すべきだとする。すなわち「可視的な身体形質とみなされるものを人種を同定する基準に位置づけているかぎり、欧米式のとくに西欧の伝統的世界観と近代の科学的人種主義 (scientific racism) によって創出された人種概念にもとづく差別のみが、「人種差別」であるという認識から逃れられない。いいかえるならば、人種概念の理解をそこに定位させてしまえば、主流集団からみて身体的には非可視でありながら、しかし社会的には抑圧されている集団の問題をどう掬い上げるかという課題が残るのである」<sup>4)</sup>と述べ、日本の在日朝鮮人や被差別部落民への差別も人種差別として取り上げる必要を強調してきた。

「見えない人種」とは、このように前書いらいの主要な関心を追求するなかで提唱されるに至った概念である。それはこれまで性格が異なるとされてきた差別問題群のあいだに補助線を引き、それらに共通する性質を探ろうとする試みともいえる。

そこで以下、評者なりの観点から「見えない人種」概念の理論射程について考えてみたい。第2部の三論文からは、日本と西洋を問わず、本来であれば視覚による見分けが可能はずの人種の表象において、その遺伝的・身体的特徴による表現に綻びが生じた際、しばしば文化的要因が持ち出されてこれが補われてきたことを看取しうる。

藤原論文は1937年から開催された大ドイツ芸術展において、ナチスが宣伝したドイツ人の祖先、「アーリア人種」の表象を分析している。同芸術展に出展した画家たちは、身体的特徴を描けない（持たない）想像上の人種を描く必要に迫られた。なぜなら、ユダヤ人迫害を推し進めた当のアーリア人種は、科学的根拠のない想像の産物に過ぎなかったから

である。藤原によれば、作品上のアーリア人をそれと識別可能としたのは、（放牧民とされたユダヤ人との対比において）農耕民族とされたアーリア人の「農民精神」を主題とし、その家系と生業の証である「血と土」という文化的要素を描き込むことであった。つまり画家たちは身体的特徴から人種を表現することの不可能性に直面し、本来は民族的要素とされる文化的特徴によって説明を補ったのである。

また李論文では植民地統治時代の日本人と朝鮮人について実施された身体形質や体格に関する調査が取り上げられている。当時の社会通念と化した人種主義的理解としては、支配者たる前者は被支配者である後者よりも遺伝的、生物的な優秀さをそなえているはずであった。しかし後者の体格上の優位性を示す計測データに遭遇した際、調査の責任者はその理由として生活習慣や気候・風土といった環境要因を持ち出し、科学的に破綻した説明を繕ったことを指摘している。

このように人種と民族の両概念の混乱や混同は、地域を問わず広くみられたように推察される。しかしこのような失敗にもかかわらず、存在しない人種を表象し、その差異と優劣の存在を明らかにしようとする志向は何に由来するのか、その機制が明らかにされなければならない。

上にみた事例研究からは、人種、民族といった概念は、特定の文脈で論理の破綻を巧妙に回避しながら縫合され、使用されてきた一連の語彙ではないかと推論できる。すなわち国民社会の周縁に位置する人びとを支配的集団から区別し、排除するとき、人種主義の暴力とともに発動されるのがこれら概念のセットなのである。その意味で定義上の区別はともかく、人種と民族の両概念にはそれが用いられる文脈において親縁性を認めることができる。竹沢が言明するように、「かつての頭蓋骨も今日の言語や習慣も、差別を正当化するために探し見いだされた差異の徴という、本質的に同一の機能を果たしているにす



ぎない」<sup>5)</sup>のである。

前掲黒川論文がとりあげた映画『橋のない川』では、登場人物は被差別部落民に対し、「夜になると蛇のように手が冷たくなる」というフィクショナルな差異や、異臭や不衛生といった環境要因的な徴表のもとに、「人種が違う」と罵る。部落差別において「人種が違う」という言説は今日でもしばしば見られる。この点について竹沢は総論のなかで、アジアのように非可視な人種の表象において、支配集団が持ち出す徴表には視覚に替わる他の認知的刺激（とくに聴覚、嗅覚、触覚）と、さらには認知的刺激なしに（「血筋が違う」などの）社会言説を通じて創出される差異があり、被差別部落民に対する差別はこれらに相当するとしている。

だがこれに対し、部落差別は民族差別や人種差別とは異なるという説明がなされることが多い。また「部落の人は人種が違う」といった言説については、単に俗説や知識の欠如、部落問題に対する無理解として片付けられてしまうことも珍しくない。こうした事情は、長らく日本の部落解放運動が「人種が異なる」という認識を批判してきた歴史的伝統によるところが大きいといえよう。

しかし他の事例研究からも明らかにされているように、人種主義が前提にしてきた身体的差異に科学的根拠がなく、虚構に過ぎないことを踏まえるとき、同様に部落問題についてもフィクショナルな人種に対する差別として、あらたな文節化の途が開かれるであろう。また被差別部落民と他の多様なマイノリティの歴史や経験を接合することで、新たな抵抗と連帯の枠組みがもたらされる可能性に期待したい。

このように人種概念を包括的に理解しようとするなかで提起されてきた「見えない人種」という概念は、人種に対するいっそう深い理解へとわれわれを導くものである。そもそも科学的根拠を持たず、虚構にすぎない「人種」の本質とは、実際には「見えない」

ことにこそあるのかもしれない。人種の研究を進めるなかで提起された人種概念を拡張する試みは、本書をとおしてより有効性を増したといえるのではないだろうか。

## おわりに

本書における表象をとおして人種のリアリティが生れるという指摘や、表象分析をとおして浮かび上がってくる人種の位相の分析は示唆に富む。こうした成果に敬意を払いつつ、最後にさらにいくつか読後の感想を述べておきたい。

本書の諸研究で明らかにされたように、様々な人種の表象がリアリティを生み出すとき、表象と社会との接点ではどのようなことが起こっているのだろうか。表象の作り手の思惑や戦略は、果たしてそのまま社会に受け入れられるのだろうか。

おそらく表象を受容する側には、作り手とは別の固有の論理が働くであろう。本書の特徴である絵画や映画を例にとるならば、それらを鑑賞した人びとは作品をどのように解釈し、どのようなリアリティを感じたのか。こうした表象の受容局面にかんする分析を推し進める必要があるだろう。また同じ作品でもそれを誰が受容するのかによりそれぞれの解釈は大きく異なることが想定される。さらには、映画や絵画作品と科学言説、社会運動における表象は、それぞれ支配権力やマジョリティ社会から与えられる正統性や承認の度合いが異なり、及ぼしうる影響力やその範囲にも違いがあるはずである。

社会的リアリティについてさらに考察を進めるならば、文学研究や文化研究において取り組まれてきたオーディエンス（視聴者、読者、受け手）研究の手法などを取り入れることで、さらに多くの知見がえられるのではないだろうか。

また「人種」「民族」そして「国民」といった概念が地球上の各地域にどのように伝播し、それぞれの地においていかに受容されてきた

のか。またそれにより多様な社会集団においていかなる自他認識が育まれたのか。超領域的な事例研究をさらに積み重ね、各地でいかに人種現象が展開してきたのかを歴史的共進性のもとに跡づける作業を、さらに継続する必要があるだろう。そこで得られた知見をわれわれの共有財産とし、人類社会がかかえる課題を解決するための枠組みの創造につなげる努力をすること。そうすることで、この人種研究プロジェクトは、さらに意義を高め広く認知されるに至るのではないだろうか。今後のさらなる展開を待ちたい。

注

- 1) 前書30頁
- 2) 竹沢泰子「「人種差別」と“レーシズム”をめぐる日米比較にむけて」『社会学ジャーナル』第20号, 1995年3月
- 3) スチュアート ヘンリ『民族幻想論』解放出版社, 2002年
- 4) 前書14頁
- 5) 前書17頁